



第 12 回 文京区医師会学術集会 抄録

平成 26 年 2 月 15 日 (土)

於 文京区医師会館 1F ホール

一般演題 (I)

座長：藤原 直之
新井 悟

1. 「免疫力ががん細胞を撲滅する ―がん治療用ヘルペスウイルス療法とは―」

奥山整形外科：奥山 英二

人間の体には毎日 5,000~6,000 個のがん細胞が生まれている。

しかし人間の中に生まれる細胞は 1 日 5 兆個もある。

数千個の出来損ないはわずかの数です。

健康であればたちまち見つかって退治され増殖することはない。

私たちの体は、この免疫のお蔭で様々な病気から守られている。

免疫系の主役は白血球のリンパ球です。

リンパ球には T 細胞、B 細胞、NK 細胞があり、特に重要な働きをするのが NK 細胞です。

NK 細胞は年をとると力が落ちる。風邪は免疫力のバロメーターです。

東大医科学研究所・藤堂教授が開発したがん治療用ヘルペスウイルス (G47Δ) とは、ヘルペスウイルス 80 以上からなる遺伝子の 3 つの遺伝子を操作して治療。

ウイルス自体ががん細胞に対し、特異的に増殖、死滅させるだけでなく、がん細胞を攻撃する免疫細胞をも活性化させる世界初の治療法である。

参考： A E R A 2012-10- 8

朝日新聞 2013- 5-16

日経新聞 2013-10- 8

2. 「循環器術後患者の歯科治療アプローチ

－歯科連携のポイント（人工弁・血管等置換後の患者を中心に）－

やまとむらデンタルクリニック 歯科口腔外科： 太田 修司

循環器疾患での cardiovascular intervention therapy を含む人工物置換または留置術後患者は増加傾向にある。

これら患者の二次感染予防には特に留意しなければならない。歯科手技による IE 等の発症予防法は日本循環器学会（JCS）やアメリカ心臓協会（AHA）などガイドライン化されているが本邦では完全に運用されていないのが現状である。

今回、人工弁ならびに人工血管置換術後患者の歯科治療時の予防アプローチについて、症例ならびに、地域医療連携の取り組みを含め考察・検討する。

3. 「未告知のまま在宅療養を送る患者とその家族に対する援助」

訪問看護ステーション けせら： 馬場 雅子

在宅で最期を迎えることを希望する人が増え訪問看護の需要がさらに見込まれる一方で、訪問看護という言葉は知っていても内容までは周知されておらず、実際に訪問看護を利用する場面に直面しないとサービスに対するイメージがつかみにくい。

また家庭に他人が入るという不安や料金的な問題で介入を拒むケースも見受けられる。

今回、若くして難治性の難病を発症したが家族の希望で未告知のまま在宅療養を送ることとなった患者とその家族への看護を振り返り訪問看護師としてどう援助していくべきかを考える。

4. 「ジェネリック薬品使用状況アンケートの結果報告」

白山駅前薬局： 川田 真二郎

【目的】ジェネリック医薬品の使用にあたり、その選定基準や問題点及び工夫している事をアンケートする。

【方法】文京区薬剤師会会員薬局 100 薬局にアンケート用紙を頒布。

【結果】選定基準は製造メーカー、流通を重視。問題点は使用感の違い、副作用の発現。

工夫していることはメリット、デメリットをきちんと説明していること。無理強いしないこと。

【考察】単純に安価なのでという理由でジェネリック使用を推進している薬局は少ない。

【結論】患者さんの有益になるようにジェネリック医薬品を選定、使用している。

一般演題（Ⅱ）

座長：谷田部 優
小嶋 奈々子

5. 「多発性椎体骨折をきたした妊娠授乳後骨粗鬆症の1例」

本郷整形外科：金 吉男

[はじめに]今回、比較的まれな多発性椎体骨折をきたした妊娠授乳後骨粗鬆症の1例を経験したので報告する。

[症例と経過]37歳、女性。平成24年9月に第1子出産。

その後母乳栄養開始。同年12月に子どもを抱っこして腰痛出現。他医で加療するも改善せず翌年1月当院初診した。身長158cm、体重50kg。神経学的異常所見は認めず、X線で著名な骨陰影減少と多発性椎体骨折あり。骨密度検査、血液およびMRI検査から原発性骨粗鬆症の一つである授乳後骨粗鬆症と診断した。授乳を中止し、VitDおよびビスフォスフォネート製剤投与とエルカトニン注を開始、半年後、デノスマブ注とVitDおよびCa製剤投与に変更し治療した。1年後、疼痛はほぼ消失し、X線および骨密度も改善した。

6. 「周術期口腔ケアを行った患者の口腔症状とその対応」

講道館ビル歯科・口腔外科：○小野祐三子 河野章江 小室朋子 三村綾子
小野里英美 清水裕子 森田雅之 高橋雄三

周術期口腔機能管理(オーラルマネジメント)は、術後合併症の減少や患者のQOLを保つなどの目的から、周術期管理の一環として組み入れられている。主に病院内の歯科・口腔外科に依頼することが多く、近年では併設の歯科・口腔外科がない病院はかかりつけ歯科医院に依頼する事例も少なくない。地域歯科医院におけるマンパワーを生かした取り組みの中で、今回は当院が経験した症例をご紹介します。

7. 「後発変更調剤について～処方薬から調剤薬へ～」

竹内調剤薬局：新井 悟

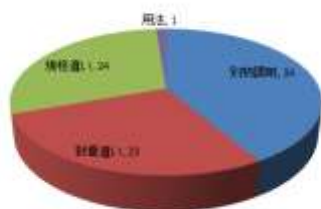
平成 19 年「医療・介護サービスの質の向上・効率化プログラム」の一つとして「後発医薬品の使用促進＝平成 24 年度までに、数量シェアを 30%以上にする。」との目標により、後発医薬品使用促進が行われてきた。

平成 18 年から、3 回に渡る処方せん様式の変更が行われ、薬局に使用促進として平成 20 年に後発医薬品体制加算(4 点)が新設され、平成 22 年からは 3 段階(5・15・19 点)になり、東京都の薬局では平成 24 年 20%を超えるようになってきた。それに伴い、薬局の仕事は変化してきた。

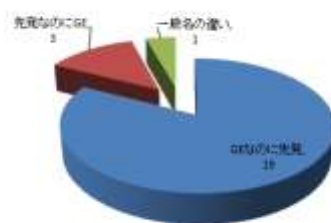
薬を取り揃える前の確認事項、後発医薬品の選択、調剤後の報告等薬局業務が煩雑になり、また、その為にインシデントが発生している。

薬局での医薬品の選択方法、また、当薬局でのインシデントを報告いたします。

インシデント事例(平成24年4月から)



ジェネリック関連インシデント



(全34件)

8. 「性感染症最近の話題 ー男子尿道炎についてー」

細部医院：細部 高英

性感染症の中で尿道炎の起炎菌として、全国定点報告されている淋菌・クラミジア感染症は 2002 年をピークに減少している。この減少の理由は明確に証明できないが、可能性を示唆する。一方、淋菌の耐性化が問題となっており、最近の抗菌剤感受性につき当院の淋菌株のデータを報告する。

また、非淋菌性尿道炎(NGU)は男子尿道炎の約 70%をしめ、そのうちクラミジアが検出されるのは 30-40%である。

非クラミジア性NGUの中で、Ureaplasma urealyticum, Mycoplasma genitalium の関連が分かってきており、当院の非クラミジア性NGUのデータを報告する。

平成 26 年 2 月 15 日 文京区医師会 学術集会 抄録

主催：文京区医師会

共催：文京区歯科医師会・文京区薬剤師会・訪問看護ステーション連絡会